

「特別記事2」 学生セッション座談会③

今回も、学生セッションに参加した学生による座談会の様子をお届けします。最終回は、「大学院生活と進路」
についての内容です。

普段の大学院生活

司会 ここまで学生セッションのお話を伺ってきましたが、ちよつとラフな話もしたいと思います。普段みなさんがどういう研究環境とか、学生生活環境にあるのかということもお伺いしたいと思います。指導教員は先ほどお伺いしたんですけど、大体どのくらいの学生がいて、ゼミがどういう形態とか、どういう頻度とか様子なのかということも含めて教えていただけるとありがたいのですが、いかがですか。

黄 磯貝淳一先生は今博士前期課程の修士一人と後期私一人、二人の学生になります。ゼミは今年大学生が多くて、八人います。ゼミは週一回で、大学院の指導は一回で、毎週、先生にお会いできるのが二回の頻度です。先生はほんとに優しくて大体週二〜三回ぐらい、論文指導を含めてお会いできます。同世代もコロナのせいで、留学生も最近はいし、あと後期の学生なので友達が少ないので、時々さみしいと思いますけど、日本人の大学生、ゼミの学生と一緒に、合研（合同研究室）と一緒に文献を調べたりとか、参考文献を読んだりとかしていますので、楽しいです。

司会 やっぱり他大学の同世代とか、修士、博士の学生とは、なかなか交流がないですかね。

黄 交流がないですね、新潟は。

司会 新潟というところで、大学の数が関東に比べると少ないというところはあるかもしれませんね。他の方はいかがですかね。

王 私は石黒圭先生のゼミに所属しているんですけども、一橋大だけじゃなくて筑波大や東京外大、明治大などからも院生の方が来てくれます。基本的には石黒先生のつながりで来てもらっているんですけども、合わせて今恐らく二五名います。

司会 大所帯ですね。

王 修士課程と博士課程の方を含めて二五名で、毎週集まって研究発表をしています。私が思うには、院生の身分だけでは、他大学とのつながりを持つことはなかなか難しいです。特にコロナ禍の中ではなおさらです。私は同じ職場で中国語を教えている他大学の院生と仕事上でつながりはしますけれども、院生の身分だけだと、なかなか他大学とのつながりがないなと思いました。そういったつながりはとても大事だなと思います。大学やゼミによって研究内容や研究方法などいろいろ違うと思います。例えば一橋では主ゼミだけじゃなくて基本的にはサブゼミも一つ選んで参加することになっているんですけども、研究室の壁を越えて他のゼミで学ぶことも、とても重要だなというふうにいつも思っております。

司会 サブゼミは日本語関係なんですか、それとも他分野というようなところも選べるということですか。

王 一橋大は第二部門が日本語教育部門です。第二部門所属の学生は第二部門からサブゼミを一つ選ぶ人がほとんどです。

司会 そうすると、日本語教育学の方と多く知り合えたりするということころなんですかね。

王 そうですね。

司会 分かりました。ありがとうございます。他の方ががでしょうか。今、お聞きしていると、やはりこういった状況で、横のつながりというか、大学を越えた院生同士のつながりというのは、なかなか難しいところがあるって、対面でないと実際に出会わないので、交流がそもそも取れないというようなところをわれわれも懸念しています。この座談会は四名の方のみ来ていただきましたけど、できれば横のつながりというところも、何かしらサポートできればなど思っています。他の方ががでしょうか。学生セッションが横のつながりにつながったかどうかというところも、もし伺える方は教えていただければと思います。

奥山 私の研究室では今大学院生が博士の方含めて八名ですね。私の同期が私を入れて三名という感じですが。今学部は三年生、四年生を含めると三一名です。来年内から院に進学するという人も何人かいるようですが、結構その辺は年によって違うという感じですが。なにぶんこのコロナ禍で研究室のほうも、特に昨年度は基本的には不要な（研究室への）来室は控える。来室する場合には予約をして、決まった時間、一時間以内等に収めるなんていう状況が続いておりました。今は幾分か緩和されておりますけれども、来室者記録を取るとか、あと長期休暇のときには、予約が必要になるとか、制限があります。ただ私は、キャンパスまで一時間半ぐらいか

かるんですけども、そういう身としてはオンライン授業等の恩恵は非常に、大きく受けているところではあります。一方で、やはり研究室ですとか図書館の本が気軽になかなか見られないというような環境で、卒業論文を書くときもそうでしたし、今年も決してその点自由度が高いとはいえないですね。

横のつながりという点ですと、まず一つには大学院の横断プログラムで人文情報学というのがあります。その授業を幾つか取っているんですけども、その中で国語学以外の人、国文ですとか社会学ですとか、そういった他の人文社会系の方と、あるいは情報学の先生方との交流が若干あるというのが一つです。あとは私の趣味的な話になるんですけども、学部時代からオーケストラでコントラバスを弾いていますが、今もお休みの日にちよつとアマチュアのオーケストラで活動しています。そこには結構同年代の人がたくさんいて、日本語学の人もいなくはないんですが、結構お互いにどういう研究しているのなんていう話は、初めて会った仲間としたりはしますけれども、逆に日本語学の中での同世代の方とのつながりというのは、そこまでやはり多くはないというのが現状です。

戸田 私も似たような感じなんですけども、まずゼミは修士が同年代が二人で、一つ年上が一人、年下一人と計四人、修士の学生がおりまして、博士の学生が五、六人いらっしゃるんですかね。研究生もいらっしゃるんです。十名以上のゼミで、研究をしています。ただ修士は修士、博士は博士でやっている部分が大きくて、修士の学生四人での活動はあるんですけども、博士と合同というのはなかなかないというのが、私の大学での感じですね。

横のつながりはほんとに今コロナ禍で、なかなかできないこともあり、他大学の学生との交流も、恥ずかしながら今回の日本語学会で、いろんな



座談会の様子

同年代の方から意見をいただいたというのが初めてでした。日本語学での接点が少なく、日本文化の接点、相撲での接点というのが非常に大きいです。私は大学でティーチングアシスタントをやっておりまして、日本文化の先生のアシスタントをしている中で、その先生がやっていらっしゃる月一回の座談会みたいな機会に参加して日本文化の話の聞いたりということはあるんですけども。日本語でのこういった集まり、他大学の同年代

の方の研究の話を聞くというのは、今日が初めてでしたので、やはり会ったほうが刺激になるなと思いました。

司会 ありがとうございます。

先ほどから出ているところでもありますが、やはりコロナ禍でいろいろなところに制約とか制限があつて、私たちは若い方同士の横のつながりが断たれているんじゃないかというのが懸念の一つなんです。それに関して、何か学会でもしお手伝いできることがあれば、努力していきたいというところなんです。横のつながりをどう守っていくかというところで、今じゃなくてもいいので、もし何かありましたらお近くの日本語学会に参加されている先生方とか、私でもいいので気付いたときに教えていただければ、そういった点を基に検討していきたいと思えます。

第二言語研究のおもしろさ／進路について

司会 お聞きする方を限定して申し訳ないんですが、黄さんと王さんにお聞きします。お二人は母語ではない日本語を研究される道を選んで、今実際に研究を進めていらっしゃるんですけども、後輩とかこれから研究を目指していく留学生の方に、留学生にとっての日本語研究の面白さはどういうところか、難しさがどういうところにあるのかというところ、後進へのメッセージというか、何か思うところがあればお聞きしたいと思つていました。いかがでしょうか。

王 私は自分の学習者としての学習経験が研究の出発点でした。そもそもこれ何で日本語ではこういうふうに言うんだろう、中国語とはちよつと違うんだなというところが私にとっての原点で、多分これからもそういういたところをさらに見つけて、研究テーマを広げてやっていくと思えます。

十年以上同じテーマでやってきて、日本語が母語じゃない人にとって、やはりどうしても越えられない限界があるなとつくづく思います。例えば使役については、もう普通の日本語母語話者よりも多くの用例を見ているのに、よく分からない用例も時々出てきます。そういうときに母語話者の力を借りて追求していくしかないのは苦しいところではありますが、何か新しい発見につながる可能性があるのは研究の醍醐味でもありますね。

司会 ありがとうございます。

黄 今は大学の専攻が日本語で、日本語のコミュニケーションができるようになったら別の専攻を選ぶ人がたくさんいます。私が言いたいのは、もし日本語に、アジア文化に興味があれば、日本語史を勉強したらどうですかということです。日本語史を勉強することで、漢字とか今使っている日本語に対する認識が深まるかもしれないし、日本語史には、表記、文法、語彙、たくさん分野があります。

もし平安時代に興味があれば変体漢文はどうですか。もし日本の演劇に興味があれば、近世語はどうですか。小説に興味があれば、明治時代の勉強はどうですか。いろいろ勉強できるものがありますので、ぜひ日本語史の中で自分の興味があるものを見つけてください。

司会 ありがとうございます。私たち（教員）が学生に言うべきようなことを言っていたらとてもありがたいところです。

王さんと黄さんからコメントいただきましたので、奥山さんと戸田さんにもちよつとお伺いしたいことがあるんですけども。お二方は今修士課程で、これからの進路のことについていろいろ考えていると思うんです。修士課程で一度研究を集大成というかまとめて、企業等に就職されるとか、先生になる方もいらっしゃるでしょうし、もうちよつと研究を続けていく、そのためにここで出したといういろいろパターンはあり得ると思うんですけど、今

将来についてどういうふうにお考えかを、ちよつとお聞かせただけならなと思っっているんですけども、よろしいですか。

戸田 私は将来的には、日本の文化の相撲の普及と、それに合わせて一緒に日本語教育の指導を行っていきたくて考えています。来年の一月に修士論文を提出しまして、博士の進学をしながら国際交流基金の派遣に今応募しておりますので、それに合格すれば一年間ほど海外で経験を積み、戻ってきて博士の研究を行いながら、ゆくゆくは日本語の非常勤だったり日本語学校の教師をやって、日本語教育の教壇の経験を積みながら、目指す自分の姿へと向かっていくということが、今のところの希望の道というか、道のりです。

司会 ありがとうございます。その場合、希望されている博士課程での研究内容は、今回発表していただいたような音声に関するものですか、それとも教育のほうにまた戻っていくような感じですか。

戸田 そうですね。今後研究を続けていく上で、よく指導教員の先生に言われているのが、一つ武器を持ったほうがいいと、一つというか何個も武器を持ったほうがいいと言われております。私の強みとしては相撲という部分での日本文化であると思うんですけど、それを主要な武器としてしまつては、やはりそこで行き止まってしまうということがあります。音声分析という関心もちょうどできましたので、メインのテーマとしては音声、サブというか研究をゆつくり進めていくものとして相撲、というふうに両方持ちながら考えています。ですので、博論を書くとしたら音声かなと考えております。

奥山 まだ修士一年ですけども、研究テーマの特性上と申しますか、やろうと思えばいくらでもやれてしまうという分野ではありまして、現時点では博士課程の進学を考えております。ちよつと今年度で教職免許の単

位は取り終わるところです。もちろん近代漢語の研究は続けていきたいと思っただけでも、それと同時に先ほどちょっとお話しした人文情報学にもちょっと興味を持っておりまして。特に明治期は膨大な資料があつて、ありがたいことにデータベースの整備なんかかなり進んではいらぬので、すけれども、やはりそこにもまだまだ課題があると思っておりますので、今はちよつとまだその人文情報学の基礎を学んでいるところではありますけれども、ゆくゆくはそういうことを活用しながら、何らかのそういうプロジェクトですとか、データベースの整備だったりとか、そういうところにも関わっていったらなと思ひながら、そういう両輪で、勉強しているところです。

学生セッションの経験を踏まえて

司会 ではそろそろお時間になりますので締めの方に入りたいと思います。最後にみなさん学生セッションを終えて、いろいろと今日お話しいただきましたけど、その経験をこれからどのように生かしていきたいか、考えがあれば教えていただけますか。もしくは単純に今日のご感想でも構いませんし、これからも研究を続けていかれる方は、これからの研究の意気込みでもいいですし、何か最後に一言いただけますか。

黄 私、修士のときは自分の研究をはっきりと説明できなかったと思います。今日のみなさんはすごく優秀だと思ひますので、これから自分を変わらないといけないと思ひました。これからも学生セッションを活用させていただいて、自分の研究を進めたいと思ひます。頑張ります。ありがとうございます。

王 今回発表をさせていただいて、先生方からご質問とコメントをいた

だけたおかげで、論文を書けば書くほど自分の世界に入ってしまったこと、自分の研究を理解してもらうためにまず大前提として説明しておかないといけないところが抜けていたことに気付きました。

今回の発表の内容を基にして、投稿したいと考えておりますので、今回の発表でいただいたご質問もコメントも本当にありがたいものばかりです。より多くの方に、自分の研究成果を理解してもらえよう論文投稿も頑張ります。今回は貴重な発表の機会をいただいて、それから講習会でもいろいろ教えていただいて、ほんとにありがとうございました。

奥山 ほんとに学生セッション当日から、今日のこの座談会も含めまして、一言で言うと非常に刺激になる場であると思ひます。もちろん発表の場はそうですし、このように実際に発表を同じ時間にやっていた人たちから、会話というかたちで、それぞれが思っていたこととか、当日の発表の裏でこんなことがあったとか、そういうことを聞くことができるというものもなかなか面白いなと思ひのと同時に、やはり日々の自分の研究に対するモチベーションにもなりますし、その辺はお互いにそういうところがあるのではないかなと思ひます。ほんとに良い時間をいただいたというふうに思っております。

学生セッションでコメントをいただいて、いろいろと自分で新しく見えてきたことというのもありますし、また学生セッションで発表したこととは別に今やっていることもあるんですけども、そういうことについてもやはり学生セッションでいただいたことというのが、根底には生きてきているなというふうにも実感するところです。今後もこれを足掛かりにして各種研究を進めていき、また発表等の機会を持ちましたら、そういうところでも生かしていったらいいなと思っております。ほんとにありがとうございます。

戸田 早いもので二カ月たって、この学生セッションで一応修士論文の方向というか、具体的な詰めていかなきゃいけないところも最終決定しておりますし、今順調に執筆をしていっているところです。学生セッションのおかげと、修士論文の謝辞にも絶対書こうと心に決めておりますし、いろいろな先生方に足をわざわざ止めて、見ていただいて意見をもらうという機会は、やはりこのコロナ禍という中でも、また学会に応募しても落ちってしまうこともある中で、非常に貴重な体験ができたということに、ほんとうにありがたいなというふうにつくづく思います。

また今日こういった学生で集まってお話しするという機会も、さまざまに日本語の研究分野でそれぞれの研究をされている同世代、年齢が近い方々のお話を聞いたりするっていうのは、やはり刺激になるなと思えました。自分より頑張っている、自分より研究が進んでいる、年下なのにすぐく研究が進んでいるということ、上には上がいるというふうに言いますけれども、それを今日体感できたなというところが率直な感想です。それ

に負けずに自分も頑張らなきゃというふうに、気持ちが変わって固まりました。本日はありがとうございました。

司会 みなさん本日はどうもありがとうございました。私たちとしても若い方の意欲のあるお話を聞けて、大変楽しい時間を過ごすことができました。研究者になれるかどうかというのは、現状分からない方も多いかと思うんですけども、これからもぜひ日本語研究について興味関心を持って過ごしていただければ、私たちもありがたいと思っております。また、ぜひ機会がありましたら日本語学会に参加、もしくは発表というところで関わっていただけたら大変ありがたいと思っております。

またみなさんと学会で、今度は対面でお会いできることを楽しみにしております。それではこれでは会はお開きにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(終わり)

これで、学生セッション座談会の記事は終わりです。ご自身の研究について、進捗報告をしたい方、行き詰まってアドバイスをもらいたい方、今後の発表のための練習をしたい方、そういった方々は、ぜひ日本語学会の学生セッションにご参加ください。
みなさんの意欲ある発表とご応募をお待ちしています！